
ゴール～終わらない中学生活～

鈴木季佑

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゴール〜終わらない中学生生活〜

【Nコード】

N1815M

【作者名】

鈴木季佑

【あらすじ】

普通の人よりちょっと優れていた主人公は、ある日突然友達だと思っていたやつに両腕を刃物で切り落とされてしまう。
死んで、幽霊になって、喧嘩して（！？）

青春＋幽霊のほんのり恋愛（！？）＝ゴール！！

もちろんフィクション。

残酷な描写とは言ってるものの、そこまで残酷な描写ではないです。

旅立ち

死んだ。

誰が？

俺が。

どうして？

両腕を切り落とされたから。

誰に？

親友だと思ってたやつに。

なんで？

俺が恨まれてたから。

そうさ。俺は死んだのさ。

気がつかなかった。自分が恨まれてたなんて、ちっとも気がつかなかった。

地区の水泳大会で優勝したり、サッカー部に入ってスタメンになれたり……

よく考えれば、恨まれる要素はいくらでもあったんだ。

でも、俺は自分が死んだ事を未だに認めることは出来なかった。

俺が死んでから一週間目の今日。

夕日が沈んでいくのを見つめながら、ただずっと校庭のサッカーゴールに佇んでいた。

> i 8 7 3 3 — 1 3 2 9 <

冬の夕やけは綺麗で、でも、どこか悲しげで……

そんな夕やけが、俺は好きだ。

旅立ち（後書き）

はじまり

正直言うと、幽霊になるってそんな悪い事じゃないかもって、生きている時は思ってた。

きつと、好き勝手できるって思ってた。

勝手に人の家に入ったり、ポルターガイスト現象起こしてみたり、友達をおどかしてみたり……

だけど、いざ幽霊になってみると、誰にも気がついてもらえないし、逆に気がつかせることもできない。

ただ、孤独で寂しいだけだ。

でも、完全に一人で、みんなに見捨てられてるってワケではない。

1週間に一度くらい、クラスメイトだった奴らが、俺が殺されたところに花を添えに来る。

泣いてるやつ、無表情のやつ、友達と話してるやつ。みんな行動は違う。

見えていて面白かった。

そっいえば、一人だけ毎日のように花を添えに来てくれるやつがいた。

クラスメイトの女子だったはずだが、名前が思い出せない。

そして、その女子と話した記憶はあまり無い。

幽霊になると、生前の記憶が曖昧になってしまうのだろうか。

そう思うと、ちょっと悲しくなってくる。

今までの楽しかった思い出が全部どこかに消えてしまう……

友達とバカやって叱られたり、家族と旅行に行ったり、サッカーの試合を見に行ったり……

「そんなの……いやだ」

自分が死んだ時より怖かった。

記憶がジワジワとなくなっていく恐怖。

そんなことなら、早く成仏したい。

でも、死ぬ前に、誰かと沢山話してから死にたいなあ。

そんな事を思ってたら、こちらを凝視する女子に気がつく。

その女子は、いつも俺にお供え物をくれる女子だった。

今日の下校時間はもうとっくに過ぎたはずだ。

「どうしたの？」

声をかけてもこちらに気がつくはずがない。

だって、俺は幽霊だ。

しかし、女子は俺のほうを凝視しっぱなしだ。

まるで、この世に存在しないものが見えているかのような……

「もしかして、俺のこと見えてたりして……？」

「えゝ！？ご、ごめんなさいーッ！！見えてますう！！何も見なかったことにするから成仏して下さいー！！」

「ウソおツ！？」

本当に見えていたみたいだ。

この慌てっぷりは尋常じゃない。

泡を吹いて倒れそうな勢いだ。

「ぎゃあー！ー！ー！！ごめんなさ……い……！」

バタンツー！！

…本当に泡を吹いて倒れやがった。

女子が泡を吹いて倒れてから1時間ほど。

とりあえず、俺はどうする事もできないので、倒れた女子を見守るだけだ。

別に、いやらしいことはやってないし、幽霊なので出来ない。

今の時刻は18時。

今日は終了式だから、13時くらいが一般生徒の下校時刻。

この人は一体何でこんな遅くに下校しようとしてるんだろう？

「…うつ…ここ…は？」

目が覚めたようだ。

先ほどよりだいぶ落ち着いているが、俺を見たらまた叫ぶのだろうか。

「ここは、学校だよ。きみ、俺の事を見て倒れちゃったんだよ」

「……あのさッ、あなた、本当にこの前死んだ稲田^{いなだ}君なの!？」

おっ、予想外の反応だ。

叫ばず、落ち着いて状況を把握しよう……

「ねえねえ、なんでここにいるの?幽霊?そうなの?なんで成仏しないの?どうして?あなたの事殺した奴がゆるせないの?自縛^{じばく}霊なの?そうなの?」

全く落ち着いていなかった。

先ほどと違うのは、恐怖におびえた瞳から、興味心身でキラキラとまぶしく輝いている瞳だろう。

「ちょっとまって!!そんないっぺんに言われたって答えられねえよ!!とりあえず、お前の名前を教えてくれ」

「あれ?覚えてないの?」

「ああ、残念だが」

「アタシ、あなたと……稲田くんと一緒にクラスだった長谷川古都だ
よ！」ハセガワユクト

長谷川古都：たしかに、どこかで聞いたことのあるような名前だ。

ふんわりした長い黒髪、ちよつとろんとした感じの瞳、凹凸ハッキリしている身体……って、何を見ているんだ俺は！？

自分がこんなにいやらしいやつだなんて思ってもいなかった。

まあ、それはおいて置こう。

長谷川さんは、さっきの慌てっぷりが全く似合わないような、見た目だけかなり大人しい、人形みたいな子だった。

「あのさ、なんで長谷川さんはいつも俺にお供え物をくれたの？」

自分の気を紛らわすために、適当な話題を振って見た。

「ヴェ！？なんで知ってんの！？」

「いや、見てたし」

「稲田君が………だから」

「えっ？よく聞こえなかった」

「……ッ、もう遅いから帰る！じゃあね！-」

長谷川さんは走って校門を出てしまった。

長谷川さん、なんて言ってたんだろう？

話を聞こうにも、明日から冬休みなので長谷川さんはたぶん、部活が無い限りこないだろう。

と思ったが……

俺は、自分の横に置いてあるモノを見て、明日長谷川さんが登校して来るだろうという事を確信した。

俺は、少しにやけながら一人ぼっちのクリスマスを校庭ですごした。

長谷川さんの通学鞆と一緒に。

安らぎ

クリスマスも終わった12月26日。

予想通り、長谷川さんは学校まで鞆を取りにやってきた。

「来ると思ってたよ」

「…もしかして、アタシに会いに来て欲しかったから鞆を忘れて帰った事黙ってたの？」

「そんなこと……」

思っていないわけではない。でも、素直に一人ぼっちは嫌だということも恥ずかしい。

「ああー！もしかして、凶星？」

「いや、そんなこと…って、長谷川さん」

「なによ？気をそらそうったって無駄だよ」

「……周り、人が見てる」

「あ……」

たぶん、周りの人たちから見たら、長谷川さんは独り言を大声で言っているように見えるのだろう。

幽霊の俺は周りの人には見えないはずだから。

そういえば、何故長谷川さんには俺が見えるのだろう？

俺たちは校舎裏に移動して会話することにした。

「で、長谷川さんはなんで俺にいつもお供え物を？」

「昨日言っただじゃん!!」

長谷川さん、かなり顔が真っ赤になっている。

そんなに恥ずかしい話なのだろうか。

「あのね、ナイショだよ…?」

幽霊だから誰にもいえないし。そう心の中で呟きながら話を聞いた。

「あと、稲田くん、ショックうけるかしんないからね」

「…? わかった」

長谷川さんが、急に暗い顔になった。

憂いを帯びた顔もなかなか魅力的だなあ。

「…アタシね、稲田くんのことを殺した拓海…小林くんと、みんなに内緒で付き合ってたんだ」

俺のことを殺した小林……

うつすらとしか思い出せない。

でも、殺したことを除けばいい奴だったと思う。

「それでね、ある日、アタシ、稲田くんに助けてもらったんだ」

「助けた？俺が？」

「うん。稲田君、忘れてるかも知れないけど」

はい、絶対忘れてると思います。

「…アタシが学校から帰るとき、いつもなら拓海と帰ってたんだけど、その日拓海が風邪で休んだの。で、帰る途中に隣りの中学校のサッカー部の人たちが、『お前、小林拓海の彼女だろ』って言って、急に蹴ってきて……」

話が長かったけど、まとめたら意外と短かった。

まず、長谷川さんが一人で下校中、急に他校生に蹴られた。

たぶん、小林への恨みを晴らすためだろう。

小林、サッカー上手だったもんなあ。

でも、俺を殺す何週間か前から急に部活に来なくなった……気がする。

それで、長谷川さんが他校生に蹴られてるところを、俺はたまたま通りすがり、人を呼んで助けた、と。

なんだか、自分の手で助けたわけではないのが、ちょっとだけ悔しかった。

「それで、どうお礼すればいいのかわかんないし……拓海、きっと自分以外の男子にアタシが近づいたら怒るから……」

長谷川さんの目に光るものが見えたが、きっと気のせいだ。うん、そうだ。

「でも、アタシ、すっかり拓海に、『稲田くんに助けてもらったんだ』って言っちゃって……そしたら、拓海が急に怒ってどっか行っちゃったの。それ以来、拓海が話してくれなくなって……たぶん、部活に出なくなったのもその頃」

気のせいではなかった。

泣いていた。

長谷川さんは、大粒の涙をボロボロと流していた。

…どうすればいいんだろう？

女子とはあまり話さないから、こつこつと時どつしていいのかよくわからない。

「あの、話すの辛かったらもう話さなくてもいいよ」

「うつん、全然辛くないの。たぶん、誰にも言わないでずっと黙ってた方が辛い」

そう言つて、長谷川さんはハンカチで涙を拭きながら、また話し始めた。

「拓海ね、急に、稲田くんの悪口を私に言い始めたの。ビックリした。いつもそんな事言う人じゃなかったから。しかも、稲田くんといつも仲が良かったから、本当に信じられなかった」

「……………そうだったんだ」

やっぱり俺は小林に恨まれていたのか。

わかってはいたけど、ショックだった。

殺される直前、あの時の小林の瞳。

恨みと怒りに染まったような感じの、恐ろしい瞳。

不気味に光る鋸と包丁。

たぶん、両方とも技術準備室と家庭科準備室から何らかの手を使って持ち出したのだろう。

あの時、「ああ、俺はコイツに殺されるんだろう」と悟った。

殺される直前、自分の腕の感覚が無くなって、両腕が落ちて、目の前にはただ腕から流れた血が流れていた。

地面は、夕日のように赤く染まっていた。

そして、急に体がふわっと宙に浮かぶような感覚がした。

走馬灯なんてのは流れなかった。

お別れ？

「きゃああああッ！！！」

夜20時、学校の校庭で誰かの悲鳴が聞こえた。

俺は、長谷川さんと別れてからずっと校舎裏で昼寝をしていた。

幽霊だって昼寝はする。

長谷川さんが帰ったあと、それしかすることが無かった。

そして、今の悲鳴で目が覚めたのだ。

誰の悲鳴だろうと思い、校庭へ行くと、信じられない光景が広がっていた。

刃物を持った謎の男が、長谷川さんらしき女子を追い掛け回していたのだ！！

長谷川さんを助けなければ！！

幽霊でも、なにかしら役に立つことができるはずだ！！

最初は俺のことが見えなかった長谷川さんが、俺のこと見えたんだから……

今はやれるだけのことをやりたい!!

しかし、俺の体は動かなかった。

しかも、体が消えかかっている。

なんで助けられないんだよ!?

なんで俺は消えてるんだよ!?

俺は成仏するのかよ!?

まだ未練タラタラなんだよ!!

目の前で長谷川さんが殺されそうになってるんだよ!!

助けたいんだよ!!

何で助けたいかは自分でも良くわかんないけど……

もし……神様が本当にいるなら……

神様、俺が成仏する前に一度だけ俺の願いを聞いてくれ……いや、聞いてください!!

無理かもしれないけど、でも、本当に……

「俺を一回生きてた頃に戻してくれーッ!……!」

繰り返し

目を開けると、俺の目の前には刃物を持った小林がいた。

……ちょっと待て。これ、状況変わってなくね？

いや、落ち着け、俺。

よく周りを見るんだ。

今は夕方じゃないか。

さっきまで夜8時くらいだったから……

「よっしゃあ！！俺、生き返ってる！！！」

「うるせえなあ……意味わかんないことほざいてんじゃねえよ。今殺してやるから……さ」

小林が冷酷に告げる。

…なんか、展開がいきなりすぎて状況がよくわからない。

夕方、小林、刃物…？

もしかして、俺が殺された当日…？

「どうやってテメエを殺そうかなあ…まず、どこから切って欲しいよ？」

そうだ、確か殺される直前にこんな事を聞かれた気がする。

んで、次のセリフが、

『水泳大会で優勝してるし、ゴールキーパーもやってるから両腕切るか』

小林と俺の声がハモった。

小林はそれについてビックリする様子もなく、ただ俺をにらみつけている。

確か、このあと俺は硬直して腕切られて即死状態だっけ？

ソレはまずい。

ちよつとなんとかして場しのぎをしなくては……

「なあ、小林？どうして俺を殺そうとするんだ？」

「そんな事聞いてどうするんだよ？…まあ、死ぬ前に教えてやってもいいか」

小林はそういうと、ため息を一つつき、目を思いつきり見開いて言った。

「お前が俺の欲しかったものを全部奪っていったからだよ！！！」

「全部…俺が奪った？」

「ああ、そうだ。親が俺に『水泳大会に絶対優勝しなさい』って言われて、頑張つて練習したのにお前が優勝して…親はそれから俺のこと見捨ててさ。そのあと、中学入ってからお前と一緒にサッカー

部に入部したら、お前だけスタメン入りして…しかも、折角俺のことを好きになってくれた古都もお前に盗まれそうになった！！！！」

ああ、俺はやっぱコイツに恨まれていたのか。

「あのさ、お前だけ武器持ってるのは卑怯じゃん。だから、喧嘩は素手でやるっぜ」

「…まあ、いいぜ」

拳で語り合おうとか、そういう類の台詞はちょっとだけ言ってみたかった。

殺されるなら、武器で殺されるより、素手で殺された方がなんかいい。

まさか、ベタな漫画みたいに拳で語り合って仲直りできるなんて思っただけじゃない。

「じゃあ、いくぜ！！」

俺はそういうと、久しぶりに大地を蹴り小林の方へ向かった。

喧嘩開始から数分後。

俺は、久しぶりにモノに触れることが出来てちょっと感動していた。

殴られた時の感じも、とても懐かしくて、どこか気持ちいい。

…俺はMじゃないぞ…！

「ゼエ…ゼエ……稲田…なかなか強いじゃん」

「ハア……小林こそ……」

お互いを見つめあい、また殴りかかる。

二人とも、体中痣だらけ。

最初の方は顔を殴られた時に、なんていうか…視界がテレビのカラーバーがちょっとぼやけた感じになってしまい、周りを見るのが辛かった。

だけど、今はだいぶ慣れてしまった。

気のせいかもしれないが、小林の顔に笑顔が浮かんだ気がした。

本当のお別れ？

「きゃあああッ！！」

俺的本日2回目の悲鳴。

喧嘩開始から数十分経過のことだった。

この誰かの悲鳴で喧嘩は中断された。

「人…呼ばれたかな？」

俺がそう言いながら不安げに小林の顔を見ると、小林はありえないといった表情で硬直していた。

「…古都……？古都の悲鳴…？いや、今日は古都を早く帰らせたから違うはず…いや、でもこれ…」

小林は、ブツブツと何かを言いながら、悲鳴の聞こえた方向に走っていった。

俺もその後を急いで付いていく。

悲鳴のした方向……校舎裏に行くと、長谷川さんと、見知らぬ中学生らしき人達が3、4人いた。

見知らぬ人たちが自分の卒業した学校の制服を着ていない限り、確か隣りの市の中学校生徒かと思われる。

「お前ら……俺の古都になにしたんだよ!？」

「俺の古都とかマジウケるわ!!お二人さん、お熱いねえ」

見知らぬ中学生、一言で表すと……下衆野郎という言葉がピッタリな金髪巨漢が馬鹿笑いする。

「さあ、二人揃って天国へ行ってらっしゃーい」

そう言うと、下衆集団は長谷川さんと小林をドンツと軽く押し、今はもう使われていない物置に閉じ込め鍵をかけた。

そして、その物置から、卵が腐ったような強烈な臭いが漂ってくる。なんだろう、この臭いは？

それよりも、コイツら、誰？

「……お前ら何なんだよ?」

「俺達？俺たちはとある中学のサッカー部でえーす」

「何で小林と長谷川さんを閉じ込めた？」

「えー？じゃあ、キミだけには特別に教えてあ・げ・る」

そういうと、下衆野郎はニヤっといやらしく笑った。

「ナ・ン・ト！あの物置のなか、硫化水素が充満しちゃってるんでーす」

「硫化水素？」

硫化水素という単語は聞いたことがある。でも、それがなんなのかはよくわからない。

「あ、もしかして、知らない感じ？硫化水素っていうのはあ…よく自殺とかに使われるあつぶなーい気体だよん」

このとき、俺はよくわからない感情で埋もれていた。

小林は俺を殺そうとした。

っていうか、俺は1回小林に殺された。

でも、神様だか誰だかしんないけど、俺を生き返らせた………という
か、時間を俺が死ぬ前に戻した。

んで、小林と殴り合って、仲直りできるかもって思ってた………

小林と長谷川さんが殺されそうになっている。

静かな怒りが沸々と湧き上がってくる。

「ニュースで“学校の物置で学生カップルが硫化水素で自殺”って
そのうち流れるぜえ」

「…めろよ」

「ハア？聞こえねーしい」

「やめろって言っただよ!!!!!!」

俺が力の限り叫ぶと、下衆野郎共は一瞬ビクツと震えて黙った。

「お前ら、この前長谷川さんを囲んでたやつらだろ？確か、お前らもサッカーやってるんだよな？なんで正々堂々と勝負しようって思わないんだよ？人殺ししてまでサッカー勝ちたいかよ!？」

今の言葉、特に最後の部分は、俺が幽霊になってからずっと、小林に言っただけだと思っただけだった。

死んでから後悔したって遅い……そう、何かの本に書いてあった。

生きてる時はあんまり深く考えてなかったけど、死んでから考えてみたら、本当にそうだなって思った。

きつと、生きてるという事自体が恵まれすぎていて気がつけなかったけど、気がついていない後悔だっただけだ。

俺だって、死んでから沢山後悔した。

だ^がど、^今、また生き返れたから、少しでも後悔しないように……

小林と長谷川さんを助けたい。

守りたい

1人で4人に喧嘩で勝てるなんて思ってない。

しかも、俺は小林と喧嘩した直後だから、体中傷だらけ。

さらに、相手はかなり体格がいい。

かなりハンデを背負ってるけど、勝ちたい。そして、大切な友達を助けたい。

俺はまず、小林達を助けるために、近くにいた人を適当に呼ぶ。

「すみません！！俺の友達が物置に閉じ込められています！！
有毒ガスの中で苦しんでいるんです！！助けてください！！」

かなり馬鹿らしかった。

これを信じてくれる人がいるだろうか？

信じてくれたとしても、有毒ガスの中に飛び込む人はいるだろうか？

ちなみに、物置に鍵がかかっているとは言っても、所詮本来南京錠をかけるところに太い木を差し込んでいるだけ。

だから、中学生女子でも頑張れば鍵を外す事は出来る。

「あのお……有毒ガスって具体的に何ていう気体ですか？」

助けを呼んでいる俺に声をかけてくれたのは、か弱そうな女子だった。

この女子の着ている制服は、確か下衆野朗共とは別の市の中学校のものだった。

でも、そんなこと、今はどうだっていい。

「硫化水素って気体なんです……！」

「ああ。なら、私が助けに行ってきますよ。安心してその人達倒してください……！」

そう言って、その女子は走って物置の方に走っていった。

…って、何で俺が下衆野郎共を倒さなくちゃ行けないことを知ってるんだろっ？

まあいいか。

さあ、あとはこの目の前の下衆野郎共を倒すだけだ！

「デメエら、かかって来やがれ！！」

「アハハハッ！正義のヒーローぶっちゃってウケるわぁ」

「そうだよ！お前はいつペン死んどけッ！！」

グサッ

自分の腹のあたりから、嫌な音がした。

さっそくゲームオーバーだと、格好のつけようが無い。

最悪。

そして、自分の腹を見ると、サバイバルナイフが突き刺さって、赤い血がタラタラと流れて……

いなかった。

というか、サバイバルナイフは俺の腹に刺さっていなかった。

俺は、また体が透けていた。

どうやら、敵は挟み込みをしていたらしく、サバイバルナイフは俺の腹でなく、下衆野朗の味方の腹に刺さっていた。

「ぐぐぐぐぐ……」

バタンッ！！

下衆野朗 A は地面へ倒れこんだ。

そして、地面はどんどん赤く染まっていく。

「おつ、おい！！どうしてお前が刺されてるんだよ！！」

何故再び幽霊になったのか全く分からない。

もしかして、完璧生き返っていたわけでは無く、タイムリミットが
あつたのだろうか。

相手に俺の姿が見えてないことを確認して、俺は物置の方へ向かった。

下衆野朗共は、慌てふためいた様子で、救急車を呼ぼうとしている。
しかし、うちの学校の先生がそこに立っていたので、色々なことが
手遅れであろつ。

「大丈夫ですか!？」

「うう……なんとか……」

「助けてくれて……ありがとうございます……」

よかった。小林も長谷川さんも無事だった。

助けてくれた女子にお礼を言いたいが、幽霊になっているので喋れない。

倉庫が水浸しになっていることから、硫化水素とやらは水をかければどうにかなるようだ。

『長谷川さん、助かってよかったね』

と、長谷川さんにむかって喋ってみるが、何の反応も返ってこない。もう何回か名前を読んでみるが、こちらの方は見えないし、聞こえていないようだった。

小林にも同様に話しかけてみるが、反応は無し。

もう、喋れる人がいなく。なっちゃったんだ。

完璧1人、か。

俺の半透明の体が、どんどん光の粒となって消えていく。

本当に成仏してしまうのだろうか？

まだ未練はあったはずだ。

小林や長谷川さん達を自分の手ですくえなかったのは仕方が無いとして……

そもそも、俺は何故再び幽霊になっているのだろうか？

そして、時間が戻る前に見た、悲鳴を上げる長谷川さんと、刃物を持った小林はなんだっただろう？

そう考えている間にも、体はどんどん消えていき、考えるという行動も面倒になってきた。

さようなら、みんな。

ありがとう。

ゴールなんて無い

死んだ。

誰が？

俺が。

どうして？

両腕を切り落とされたから。

だけど、2回目の死は死因不明だ。

誰に？

親友だと思ってたやつに。

なんで？

俺が恨まれてたから。

でも、2回目の死は一応仲直りしたという事で。

…本当に死んだんだなあ、俺。

でも、成仏したはずなのに、成仏してない。

夕日が沈んでいくのを見つめながら、ただずっと校庭のサッカーゴールに佇んでいた。

冬の夕やけは綺麗で、でも、どこか悲しげで……

そんな夕やけが、俺は好きだ。

そう思いながら、まぶたを閉じる。

俺の中学生生活はこうして幕を閉じ……

「稲田くーん？起きてよー？」

「いーなーだー！校庭で寝てたら風邪ひくぞー！」

ビックリして目を開けると、長谷川さんと小林が、ニコニコしながらこちらを見ていた。

「稲田あ、俺達ずっとお前の事探してたんだぜ？」

「え…お前ら、俺のこと見えるの？」

「ハア？何言ってるんだ、お前？見えるに決まってるだろ？幽霊じゃあるまいし」

「え、いや、俺は幽霊…」

「馬鹿なこと言ってるんで、早く帰ろー！」

そう言っつて、長谷川さんと小林は俺の腕を引っ張った。

俺の中学生生活はまだ終わっていなかったらしい。

じゃあ、先ほどの出来事は、すべて夢だったのだろうか。

まあ、そういう事にしておけばいいか。

俺の中学生活が、再び幕を開けた。

ゴールはいつでも目の前にあるけど、すぐに逃げてしまう。

俺たちは、きっと、その逃げてしまうゴールを追って生きていくのだらう。

ゴールなんて無い（後書き）

はじめまして& a m p ;こんにちは。

すすぎときすけ
鈴木季佑と申します。

って、最初にも言いましたね（汗）

この小説は、とあるブログに書いていたものを加筆訂正し、ストーリーを大幅変更してF C 2小説に投稿したものをさらに加筆訂正し、小説家になろう様公開させていただきました。

書き終わったあと、真っ先に思ったことは、終わってるのに終わらない中学生生活という題名はどうかという事でした。

ちなみにゴールというのはサッカーゴールのゴールです。

稲田君がゴールキーパーという設定があるんですが、活用できなかったことをとても悔やんでいます。

番外編、書きたいなあ。

ここまで読んでもらえて、本当に嬉しいです。
以下スペシャルサンクス。

スペシャルサンクス

小説家になろう様

FC2小説様

yahooブログ様

主人公のモデルのSくん

登場キャラの名前を一緒に考えてくれたAさん

サッカー部の人

この小説を読んでくれたすべての皆様

レビューや励ましの言葉をくれた人。

本当にありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1815m/>

ゴール～終わらない中学生生活～

2010年10月10日06時30分発行